

+ 4 9 【ひまつぶし】

とある早朝、村の夫婦が馬車で町まで行こうとしたら、その途中で馬がいなくてとまった。

そこで女房が前を見ると、馬の先に牛が仁王（におう）立ちになっている。

仁王立ちになった牛なんて見たこともないから、馬でなくとも恐ろしがる。

女房は腰をぬかし、旦那がふるえる声で、

「あんた何者じゃ」

というと、仁王立ちの牛は、

「【ひまつぶし】なのだ」

と答えた。

「なぜに邪魔（じゃま）するんじゃ」

というと、【ひまつぶし】と名のった牛は、

「ひまだからなのだ」

と答えた。

「わしらは忙しいんじゃ」

というと、

「すまなかった、なのだ」

といって、朝霧（あさぎり）のなかに霧消（むしょう）してしまいました。

そんな話を、この夫婦からきいたことがありました。

「こまったおばけじゃのう」

そう懐爺にいうと、

「【ひまつぶし】はどこの村にもいます。隣村では聞き違えて【ひつまぶし】と呼んでいますかね。これからはおばけもどンドン暇になりますから【ひまつぶし】がどんどんでてくるようになります。いずれ遠からず金ちゃんの前にも登場しますよ」

「やっばし、わしかい。なぜにこうもわしのところにでてくるんじゃ」

半分怒って半分悦んで、ききました。

「前にもいったでしょう。それは金ちゃんがおぼけを好きだからです。こちらが好きなら、だいたいあちらも好きになる。大昔の中国の学者がこうっています。化物は常に好むところに集まる」

やっばし、でた。

ぼくが蛙を餌にしてざりがにを釣っていると、小川の中から仁王立ちの豚が登場しました。

「おまえはもしかして、【ひまつぶし】かのう」

ときくと、

「ばれたのだ。とにかくひまで困っているのだ。退屈（たいくつ）しのぎに、こどもでもおどかしてやろうとおもったのだ。失敗なのだ」

「いや、せいこうじゃ。たいくつなら、いっしょに、ざりがにとろうかのう」

そういうと、【ひまつぶし】は悦んで、

「ありがたや、なのだ、ありがたや、なのだ」

といいながら、三分もかけずに、小川のざりがにを、ぜんぶとってしまいました。

でも【ひまつぶし】がとる、ということは、たべることなので、小川のざりがには、すっかり消滅（しょうめつ）してしまいました。

「こらあ、わしのおやつを、ぜんぶ、くいやがって」

と文句をいうと、

「すまなかった、なのだ」

といて、小川の水に溶けてしまいました。